

# ルソン島北部先住民族の子供たちを対象とした 演劇を活用した環境教育プログラム

## 完了報告書

(2014 年 3 月 16 日～2015 年 3 月 15 日までの活動)

所属機関名: コーディリエラ・グリーン・ネットワーク

Cordillera Green Network

《フィリピン事務所》

住所: 25 J.Felipe Street, Gibraltar, Baguio City, 2600, Philippines

[Tel:+63-744230839](tel:+63-744230839)

《日本事務局》

住所: 広島県尾道市向東町 8885-12

E-mail: [cordigreen@gmail.com](mailto:cordigreen@gmail.com)

代表理事: 反町真理子

### 【概要】

貴財団から助成を受けた当事業は、学生たちの夏休み期間中(4-5月)に地域の環境問題と民話を素材とした演劇ワークショップを終了し、また、それぞれ発表会も終えた。コミュニティ側の都合と、ファシリテーターの来比可能なスケジュールの関係で、日程と会場を3つに分散し、開催日数を増やして開催することになったが、目的に合致した内容の濃いワークショップとなり、参加したさまざまな民族の子供と若者たちと、ワークショップで制作した演劇作品を発表を鑑賞した観客からは、高い評価を得た。

実施したワークショップの参加者は以下の通り

- 1回目(6日間)(ティグラヤン町の4つの小学校) 118名
- 2回目(3日間)(サバンガン町のセント・ジョセフ修道院ホール)17名
- 3回目(3日間)(キアンガン町のバギギ小学校)29名

演劇ワークショップの過程で、環境保全、自然保護、自然に対する畏怖の念を伝える先住民族に伝わる民話を収集し、その中から環境教育教材としたい民話を選んだ。子供たちに対してインパクトのある本とするために絵本として制作することとし、その挿絵も環境教育の要素を取り入れ、子供たちに土から作った絵の具で描いてもらこととし、そのためのワークショップを行った。制作した絵本は民話のふるさとであるティグラヤン町の小学校に配布中である。

## 【開催したワークショップの詳細】

### ① 2014 年 4 月 15-21 日

ティグラヤン町の 10 の小学校の生徒たちを対象に、カリング民族に伝わる民話をベースとした演劇ワークショップ、演劇の発表会場で展示する 3 つのエコ・アート・ワークショップを開催した。ワークショップで制作した演劇作品とアート作品は、ティグラヤン町のフェスティバル「UNOY FESRIVAL」のアースデイ・プログラムの一つとして、発表し、多くの村人が鑑賞した。

ワークショップの参加者は、環境演劇ワークショップが 35 名、演劇発表会場を飾るエコアートのワークショップが 83 名だった。

### ● 内容

環境演劇ワークショップでは、ファシリテーターをアンジェロ・アウレリオ氏、ロジャー・フェデリコ氏、西尾純氏、カルラ・ロシート氏が担当した。参加した子供たちは、初めて演劇に触れる子供がほとんどで、初日には心配する親に連れられてくる子供も多かったが、2 日目以降は、楽しい体験型のワークショップであることが認識され、参加の子供は日を追うごとに増えていった。

6 日間にわたるワークショップの内容は、体を動かすゲーム、声を出すゲーム、チームワークを強めるゲーム、自然を感じる感性を磨くためのアクティビティなどに始まった。民話をベースとした演劇ワークショップでは、参加者の子供たちが親や近隣の子供たちから聞いてきた民話、神話、伝説を発表しあい、グループに分かれて、それらの物語の内容を話し合い、役柄と設定を決め、劇を創作した。その作品をお互いに発表しあい意見交換し、その中から最終的に皆で地域の環境問題を伝えるのにふさわしい物語を二つ選んで、練習した。環境問題は、サークル・オブ・コンフリクトという手法で、二人組で即興劇を演じた。

日本からファシリテーターとして参加してくれた先住民族の身体表現を専門とする西尾氏は、先住民古来の身体表現の伝統に即した体の動かし方のワークショップを、演劇ワークショップの一部として行った。子供たちよりも、子供たちを引率した教員の関心が高く、教員たち向けのワークショップも特別に行なった。



演劇の発表会場を飾るエコアートのワークショップは、ルブルパ小学校で 3 日間、バンガッド小学校を会場に 2 日間開催した。参加希望者が多く、3 つのグループに分かれてワークショップを開催した。それぞれのグループのワークショップの内容は以下。

### 1. ソイル・ペインティング



アクリル絵の具や油絵の具は、先住民の村では高価で入手しにくく、また、素材が環境にもよくない。山の村では当たり前の土の色の豊かさを見直し、それを絵の具にして、演劇のワークショップで子供たちが集めた民話をそれぞれ描いた。ファシリテーターは、ビンセント・ナバロ、フロレンダ・ペドロ。

### 2. ゴッズ・アイ

マヤ文明の伝統文化をベースにして、演劇発表会場を飾るカラフルなインスタレーションをアクリル毛糸を織って作るワークショップを行った。青色は空と水を意味し、赤い糸は生命を意味し、黄色は太陽の光、緑は環境。その4色を十字に組んだ拾った小枝に織り込み、生命のサイクルについて学ぶ環境教育とした。ファシリテーターは、ルイサ・ガラン、ライアン・メンドーサ。



### 3. マスク・メイキング

ティグラヤン町に流れるチコ川流域の粘土と古新聞で、マスク作りのワークショップを行った。さまざまな村から参加した子供たちがお互いの顔を観察し、似通ったところと違うところを確認しあい、楽しみながら面を作った。民族が違って、それぞれが暮らす村々にまたがる森林、川を守る役割は、民族を超えて協同



していく必要があるというワークショップとし、制作した作品は、演劇発表の会場に展示した。ファシリテーターは、タラ・ナティビダッドとシェイン・ダウィッグ。

### ●発表

ティグラヤン町の UNOY FESTIVAL のアースデイ(4月22日)プログラム「エコ・アートフェスティバル」会場で発表された。ワークショップに参加した子供たちの両親、兄弟、学校の教員、地方自治体の職員、近隣の住民など、約200人が鑑賞した。エコ・アート作品は演劇発表ののちも1週間展示され、作品は子供たちがそれぞれ持ち帰った。

### ② 4月30日～5月3日

サバンガン町のセントジョセフ・ホールで、コーデリエラ地方の5つの州のさまざまな民族の青少年17名を対象に3日間のワークショップを開催した。ファシリテーターは、環境問題に関するレクチャーをリリー・ハミアス、地域の環境問題をテーマとしたフォーラムシアターのワークショップを花崎攝氏、先住民の自然保護の知恵と伝統を伝える民話をテーマとした演劇ワークショップをアンジェロ・アウレリオ氏が担当した。予定されていたアレックス・トゥマパン氏の竹楽器作りのワークショップは講師の体調不良で中止となった。



### ●内容

1日目:コーデリエラ地方の環境問題に関するレクチャーののち、参加者がお互いを知り、チームワークを築き上げるための体を動かすアクティビティを、花崎氏、アウレリオ氏が行った。夜はたき火を囲みながら、参加の若者たちがそれぞれの民族に伝わる民話のストーリーテリングを行い、物語に込められた先人の環境保全の知恵や知識をシェアした。

2日目:演劇的なゲームで開始されたのち、参加者が演劇の教育における効果についてそれぞれの経験を話し合った。アウレリオ氏の指導で「サークル・オブ・コンフリクト」という即興劇の手法で、出し合った地域の環境問題をテーマに二人組で演じた。花崎攝氏の指導で、身体表現のさまざまな可能性を引き出すアクティビティが行われた。「ミラーゲーム」「スカルプチャーゲーム」「ヒューマンボディ・マシーン」など。その後、コミュニティにおける社会問題についてさまざまな解決の可能性をシミュレーションするために、世界中の教育現場で実践されている「フォーラム・シアター」の手法についてレクチャーとワークショップが行われた。夕食後は日本の水俣病についてのビデオを鑑賞した。



3日目:前日に鑑賞した「水俣病」のドキュメンタリーを見た感想から、参加者から出されたキーワード「水銀」「魚」「記憶」などをテーマに参加者が詩作をした。その詩の朗読発表会を行い、参加者の一部は自主的に演劇的要素を含んだ発表

を行った。グループに分かれ、1 日目に語られた民話の中から一つの民話を選び、シーン設定、登場人物のキャラクターについて話し合い、練習を行った。夕食後、サバンガン町のハイスクールの教員、役場職員、近隣の住民などを集めて、小さな発表会をたき火の下で行った。

※写真アルバム

<https://plus.google.com/u/0/photos/101439197484450138832/albums/601090630358205544>

[1](#)

### ●発表

二つの民話のうち「Fugtongー黒犬」の民話劇を、公演ツアーのために来比していた「ケイタケイ・ムービング・アース・シアター & 黒テント」の公演会場で発表させてもらえることになり、5 月 31 日に TIU 劇場で、プロの劇団の前座として発表する機会に恵まれた。観客は約 300 人。マニラ在の日本人や黒テントと交流のある演劇関係者が多く訪れた。「言葉はわからないが、エネルギーの圧倒された」「たった 3 日のワークショップで作ったものとは思えない」「山岳民族のダンスを始めてみた。興味深い」といった意見が聞かれた。

You Tube

<https://www.youtube.com/watch?v=BGcltxPpx0>

写真アルバム

<https://plus.google.com/u/0/photos/101439197484450138832/albums/602627637831821206>

[5](#)

### ③ 5 月 4ー6 日

キアンガン町のバギゲ村の「スクール・フォー・リビング・トラディション(SLT)」(フィリピンの文化庁が伝統文化継承のために推奨しているプログラム)のメンバーの子供と青少年(6ー16 歳)を対象にワークショップを開催した。ファシリテーターは花崎攝氏、アンジェロ・アウレリオ氏、アシスタントとして、ジェリカ・ガダン、レスター・バルットゥ、ベントール・ガナド、ロジャー・フェデリコ、ライネット・マヤピット、レマール・ダムウンが指導に当たった。参加者は 29 人。



## ●内容

1 日目:お互いが知り合い、チームワークを構築し、集中力と記憶力を鍛え、積極性を引き出すためのゲーム数種をまず行った。単純に演技の仕方を学びに来た参加者に対してアウレリオ氏が演劇の可能性のレクチャー。他民族の文化を学ぶ重要性について強調。アブラ州出身のアシスタント・ファシリテーターによるアブラの伝統ダンスのレッスンののち、地域の環境、社会問題をテーマとしたセリフのない寸劇のアクティビティ「タブロ」を実施。環境問題より「家庭の崩壊」「飲酒による殺人」などの身近な社会問題をテーマとしたグループが多かった。

2 日目:感情表現の方法。コミュニティでの普通の家庭の日常生活を演技で表現。環境問題をテーマとした即興劇アクティビティ。野菜畑の農薬散布の問題、川での洗濯に洗剤を使うことによる魚に対する影響などがテーマとして挙げられた。

3 日目:2 グループに分かれて、1グループはキアンガンに伝わる民話「アンブラヤ湖の兄弟」をテーマに演劇作品の練習。もう1グループは、「サークル・オブ・コンフリクト」の練習。

## ●発表

キアンガン・セントラル・スクールにキャンプに来ていた約 150 名の障がい児とその付添いの方、ツアーを率いる NGO の方にお集まりいただき、二つの練習した作品の発表を行った。会場の屋根つきのグラウンドに演劇用の音響や照明装置がなく、伝わりにくいところもあったが、観客の障害のある人たちは大変喜んでくれ、お礼の歌を歌ってくれた。ワークショップ参加者は感動の涙を抑えられなかった。



※写真アルバム

<https://plus.google.com/u/0/photos/101439197484450138832/albums/6010947283646287489>

ワークショップの様子は CGN のブログにも掲載しています。

<http://cordillera.exblog.jp/22605655/>

## 【環境教育教材の民話本の制作】

ワークショップを開催した3つの地域でそれぞれ民話を収集し、それをベースとした演劇作品を制作し発表したが、環境教育教材としての民話本にはティグラヤン町で収集した民話の中から「The Lupulupa Village and River Creatures(ルプルパ村と川の生き物たち)」を選んだ。ティグラヤン町に暮らす先住民族の民話は一般にはほとんど知られておらず、山奥深い村であるだけに、精霊や自然に生きる生物についての興味深い物語がたくさん残っていた。

「ルプルパ村と川の生き物たち」には、川に住むウナギとカニのほか、川の生き物たちを痛めつけたことが原因で起こった災害で行方不明になった子供たちを救うために鳥たちも活躍する。川や森に住まう野生動物たちが人間に対して災害という形で復讐し、また、助けにもなる。人と自然が近い典型的な先住民族の集落の暮らしをよく表し、また、命の宿った意思のある野生動物も描かれていて、子どもたちの創造力をかき立てるのにぴったりの素材であった。また、この民話には人間でも動物でもない「アングタン」という怪物が登場するが、災いを起こす精霊としてティグラヤンの先住民族の間では人々が今も恐れる精霊であり、人の力でコントロールできない超自然的なものとともに暮らす先住民族の村を描いて大変興味深いものであった。

当初、絵本の挿絵はプロのアーティストに依頼する予定であったが、描くのが難しい想像上の怪物なども登場することから、民話の生まれた村の子供たちの想像力に任せて描いてもらい、それを挿絵とすることに計画を変更した。

また、環境教育教材としての制作のため、挿絵もルプルパ村の土を子供たちに採取してもらい、それを絵の具として描く「ソイル・ペインティング」の手法を使うこととし、2015年1月に再びティグラヤンを訪れ、子供たちに絵本の挿絵をソイル・ペインティングで描いてもらうためのワークショップを行った。

完成した絵本は、バギオ市内に住む環境活動家の作家による監修を受け、また、フィリピン大学芸術学部講師の手によってレイアウトされ、コンパクトで美しい絵本となった。印刷部数は1000部とした。絵本が完成したのが3月に入ってからだったため、ティグラヤンの学校が夏休みに入ってしまう、一部関係者に配布したが、すべての学校への配布を終えていない。新学期が始まる6月以降に配布を継続する予定である。

本のファイル

[https://drive.google.com/folderview?id=0B58L3p7Nw\\_JfflB5UkRKVW44LXVPbHFWNmVvLWh6VIQzckxHMEJOZTk2djl4eFBQdGd0RkU&usp=sharing](https://drive.google.com/folderview?id=0B58L3p7Nw_JfflB5UkRKVW44LXVPbHFWNmVvLWh6VIQzckxHMEJOZTk2djl4eFBQdGd0RkU&usp=sharing)